〈海縁〉ネットワークの形成
―移住開拓島の民俗学ノート（二）

野地恒有

＊海縁とは海によって結ばれたえにしのことである（野地　二〇一一b）。

はしがき

①移住開拓島

移住開拓島とは近代以降の移住により形成された島あるいは集落（シマには集落という意味も含まれる）のことである。

柳田国男は「日本の島々」で、島の歴史研究について次のように書いている。

「一つ一つの島の成り立ち、そこへ渡ってからの苦闘建設の歴史は、それ自身爽快な課題であり、また住民の切なる課題でもあろうが、残念ながら時がすでに遅く、あるいはもう間に合わぬのではないかとも思われる。人の住む小島の数が、今でも日本には四百以上、その起立の明らかに近代に属するものは十ばかりしかない。どんなに私たちが手分けをしても、これを片端から見て行くには時がかかり、そのうちにはまた隠れてしまうものが多いであろう。」（柳田　一九八九：六七五）

まず、この引用箇所を含めて、「日本の島々」全体を要約しておこう。「一つ一つの島の成り立ち」や島へ「渡ってからの苦闘建設の歴史」は重要な課題であるが、島の文化は消滅に瀕しているので、そのような島々の多様性に立って島の歴史を微視的にとらえるという課題に対処している時間的余裕はない。と、ここまでが引用箇所の内容である。そして、次のように続いていく。日本の島々は「だいたい同じ方式、同じ機会、同じ資材によって経営せられたかと思われ」て「異分子痕跡の少な

い」という特徴をもっているから、「個々の島限りの探求や討査」ではなく、島々の共通性に立って島々に見られる変遷のいろいろな段階を比較し綜合することによって、島の歴史を巨視的にとらえて明らかにしなければならない。

そこで引用箇所に立ち戻ってみると、ここでは、私の移住開拓島という視角の立脚点が二つの側面から否定されている。

第一に、移住開拓島のとらえ方は「一つ一つの島の成り立ち、そこへ渡ってからの苦闘建設の歴史」をとらえていくことである。しかし、「島の成り立ち、そこへ渡ってからの苦闘建設の歴史」を一つ一つ見ていくというやり方は、「時がすでに遅く、あるいはもう間に合わ」ないし「片端から見て行くには時がかかり、そのうちにはまた隠れてしまうものが多い」と、消極的に否定的に位置づけられている。だから、島々の共通性に立って巨視的にとらえらえていくことを柳田は主張する。

第二に、移住開拓島という視点は、近代以降に起立された島を対象としている。しかし、柳田が求める島の人生に「起立の明らかに近代に属する」島は除外されている。(「起立の明らかに近代に属する」島であっても、起立のはじまりは近代以前であって、その後にくり返されてきた移住史の一コマの中で、近代以降の移住・開拓により建設された島（集落）は一〇ばかりということではないだろう。)

移住開拓島というとらえ方は、柳田によって二側面から否定されている、近代に形成された「一つ一つの島の成り立ち、そこへ渡ってからの苦闘建設の歴史」を微視的に見ていこうとする分析視点である。

「日本の島々」が所収されている『島の人生』は一九五一年に刊行された。その著作には、一九〇九年から一九三四年に発表されたもの（これらを初期作品と呼ぼう）と一九五〇年前後に発表されたもの（これらを刊行時作品と呼ぼう）が収められている。「日本の島々」は刊行時作品である。初期作品では島々の多様性に立った微視的なとらえ方に基づいている。それに対して、刊行作品では単一・同質の文化を前提とした島々の共通性に立った巨視的なとらえ方に基づいている。刊行時作品の巨視的なとらえ方は、『海上の道』へ展開していく。『島の人生』は、『海上の道』所収の論文が発表されている最中に刊行された。『島の人生』は、その刊行当時、「海上の道」論を構築していた柳田が巨視的な島のとらえ方の編集方針によって、過去に試みた微視的な島のとらえ方を方向転換させ封印した著作であった。刊行時作品の巨視的なとらえ方は『海上の道』へ展開していったのに対して、微視的なとらえ方は柳田によって自ら否定されその研究の中で取り残された。移住開拓島という視点は、柳田によって封印された島の微視的なとらえ方に位置づけられる。[1]

②ネットワークのかたち

移住社会はそこにある。そして、その生活はそこにある。しかし、移住先の地に、出身地からもってきた何かを求めても、移住先の地域から取り入れた何かを引きだそうとしても、その断片は集められても、そこから移住社会の文化はとらえられない。出身地の文化のようで出身地の文化ではない、移住先の文化のようで移住先の文化ではない。それではそれは何か、どのようにとらえるのか。

移住社会は移住先の周辺地域との関係性を構築することによって形成される。周辺地域との間に取り結ばれるさまざまなネットワークのかたちが移住社会の文化なのである。

一九八五年頃、私は、青森県大畑町で一八九〇年代（明治二〇年代後半）に形成された移住集落を調査していた中で、『大畑町史』に「（大畑町では）松前に移住する者続出し、明治一六～七年頃には本町、東町等空家を生ずるも購ふ者なく、之を毀ちて薪に焚くの珍現象を呈した」（笹沢　一九三四：二）という一文を見つけたとき、この入れ代わりの激しい流動的な姿が移住集落の特徴であると直感するとともに、そこに描かれた大畑町の情景に、小学生のころに暗唱させられた「方丈記」の有名な冒頭が浮かんだのを覚えている。それは次のくだりである。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまりたる例なし。世中にある人と栖と、またかくのごとし。　たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、高き、いやしき、人の住ひは、世々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねば、昔しありし家は稀なり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変らず、人も多かれど、いにしえ見し人は、二三十人が中に、わづかにひとりふたりなり。」（西尾　一九五七：二三）

絶えず流れゆきとどまることはない河の淀みに浮かぶうたかたのような「都」にどのような文化が蓄積するのであろうか。続出した転出者たちの空き家をこわして薪にするという珍現象を呈した大畑町にどのような文化が蓄積するのであろうか。

都や移住集落の内部には、「かつ消えかつ結びて、久しくとゞま」ることはないように、何も蓄積しないかもしれない。しかし、そこに住む人々の外部とのつながり方に、都や移住集落の文化を特徴づけるものが蓄積する。外部との間に取り結ばれるネットワークのかたちが文化を形成する。周辺地域との間に取り結ばれるさまざまなネットワークのかたちが都や移住集落の文化なのである。

都の人々であれ、松前に移住した大畑町の人々であれ、流れ

ゆく人たちの側から見れば、彼らは専一的な技術[2]と外部に広がるさまざまなネットワークを持っているから、新たな定住地へ移動するという生き方が可能だったのである。

一、海縁とは何か

①内縁系と外縁系

〈海縁〉とは海のへり、ふちのことではない。海によって作り出される縁（えにし）、海を媒介とした関係のことである。この海縁について述べる前に、まず、〈外縁系〉と〈内縁系〉について述べておかなければならない。

我々の社会には内と外に向かってさまざまなネットワークがはりめぐらされている。社会の内部にはりめぐらされている諸関係を内縁系、社会の外部にはりめぐらされている諸関係を外縁系と呼ぼう。

伝統的な社会においては、とくに内に向かってはりめぐらされている濃密なネットワークが注目され、民俗学では、この濃密な内縁系を明らかにすることに重きが置かれてきた。

伝統的な社会の内縁系の姿は、自給自足の完結体という幻想を抱かせる。しかし、内縁系だけに目を向けると自給自足に見えるが、どのような社会といえども、外縁系をもたない社会はない。歴史学者の高取正男が、〔人間の社会は、自給自足度が高いほど、外部世界とのコミュニケーションや交易に多くのエネルギーを使わねばならない〕と言ったように（高取　一九七五：一四二～一四四、一七八）、自給自足度が高そうな社会だからといってそこが自己完結体であるわけではない。

さて、移住社会に目を向けてみよう。移住社会も内縁系・外縁系をもっている。しかし、その内縁系がどのようなかたちをしているか、私にはまだ明らかになっていない。移住社会の内縁系は何も伝承していないのではないかとさえ見えてしまう。少なくとも、従来の民俗学がやってきた、伝統社会の内縁系をとらえる延長では移住社会をとらえることはできないということだけはわかっている。

それに対して、移住社会では外縁系が重要な役割を果たしてきた。先に、移住社会は移住先の周辺地域との関係性を構築することによって形成される、と私は言った。周辺地域との間に取り結ばれるさまざまなネットワークのかたちが移住社会の文化である。つまり、移住社会の文化とは外縁系のかたちのことである。移住社会の文化は外縁系に蓄積する。

外縁系は伝播の道でも伝播を説明する要因でもない。私は、そのようなとらえ方としては、外縁系をまったく考えていない。移住社会の文化は、出身地や周辺地域から移植された文物によって特徴づけられるのではない。出身地や周辺地域との間に取り結ばれるさまざまな外縁系のかたちによって特徴づけられるのである。

②海縁について

移住社会とは外縁系が優位になって構築されている。いわば外縁系優位社会である。その外縁系の一つが海縁ネットワークである。

くり返し定義してきたように、海縁とは海によって作り出されるえにし、海にかかわる人やモノの移動が作り出す関係のことである。土地に基づく関係を地縁といい、血筋に基づく関係の血縁というのと同様な、縁を使った用法であり、海を媒介とした関係のことである。そして、移住社会では、血縁や地縁とは異なる、海を軸として広範囲に多方面に向かって作り出されてきた関係―海縁―が重要な役割を果たしている。

海縁ネットワークは移住開拓島をとらえ分析する視角であり、地域おこしや復興ビジョンにつなげられる課題につながると考えている（野地　二〇一一b）。

海にかかわるヒトやモノの移動が作り出す海縁ネットワークは沿岸部だけのことではない。内陸部とのつながりもある。海縁ネットワークは、沿岸を結ぶ「海域ネットワーク」という課題を出発点として見出された視点であるけれども、沿岸を横につなぐ海域ネットワークとは異なっている。内陸にあっても海縁ははりめぐらされており、海縁ネットワークによって生み出される日本の文化的特徴を、私は、かつて「海洋性」と呼んだのだった（野地　二〇〇八b）。

海縁を作り出すものとして海の生業は大きな存在である。しかし、必ずしも、海の生業だけによって結ばれた関係のことではない。

また、海に対する山という安易な連想から、海縁に対して山縁などという言葉が対比的に思い浮かぶかもしれないが、この海縁とは社会の外に向かってはりめぐらされている関係をあらわすものとして位置づけている。つまり、海縁は外縁系のひとつである。よって、外縁系に含まれる海縁の対立語は、山とか平地などではなく、内縁系の関係性を示す何かでなければならない。

二、瀬戸内海の移住開拓島と海縁ネットワーク

①移住開拓島・小手島

たとえば、移住開拓島として、香川県丸亀市広島町の小手島（おてしま）を取りあげてみよう。小手島は、一九三七年に渋沢敬三を中心としたアチックミューゼアムにより実施された瀬戸内海島嶼巡訪調査で対象とされた島の一つである。この調査は、一九三七年五月一五日から二〇日の六日間に、瀬戸内海中部の二六の島と五つの海浜を船で巡航しながらおこなわれた（河岡　一九七三：一〇五九～一〇六四）。この調査資料は桜田勝徳によって整理されて、一九四〇年九月に「瀬戸内海島嶼巡訪日記」とし

て刊行された。これが小手島の日本民俗学史上へ最初の登場であろう。この調査をふまえて、小手島は「困窮島」として、桜田勝徳（一九七〇　一九八〇）や宮本常一（一九六五　一九七三）によって取り上げられている。「瀬戸内海島嶼巡訪日記」によれば、小手島は次のように報告されている。

「四十年ほど前まで*1はこの島は牛飼場*2であった。この番をしに手島から渡ったと言われる大倉、合田、合ノ木の三戸*3がある。これを山の者*4と呼んでいる。そうしてがんどうつねぞうと言う者が、手島から渡って来て開墾しはじめ、今日の村を致すに至ったと言われ、つねぞうは地神様として祀られている*5。

開墾以来、各島から人が来島して今は四〇戸にもなっているが、北木島真鍋島から来た者が多く、ことに北木島の金風呂から移住した者が多い。・・・この島にはすぐそばの、手島からではなく、多く備中領の北木島から移住しているのは興味深い。・・・島の一番高いところに地の神様が祀ってある。祭神はがんどうつねぞうを祀ったもので、石祠には地神と刻っている。雨乞いの時にはここに詣る。」（アチック・ミューゼアム　一九七三：四二七）

【引用者注】

*1　一九世紀末、明治三〇年頃のこと。

*2　本稿の巻末「続・犬と移住」参照。

*3　筆者調査の聞き書きによれば、《大倉、合田、合木（ごうぎ）は最初に入植した三軒といわれ、サンゲンヤと呼ばれている。古い家には屋号があり、大倉はカンベエ、合田はナカノイエ、合木はコナンダである。「小手島の人の三分の二以上は北木島から来ている」という。》

*4　「山の者」とは小手島の山の権利を持つ者という意味に私は解釈している。

*5　写真1参照。筆者調査によれば、《地神の石碑と開拓者の石碑がともに建っているが、地神が開拓者を祀るというわけではない。「地神の下には平家の刀が埋められている」という。》《　》は聞き書き内容を示す。

②「小手島は手島の人名持ち」

小手島の歴史をとらえる上で、手島の人名（にんみょう）制との関係を考えなければならない。小手島は手島の人名の島であった。

人名とは、一六世紀末に塩飽諸島の船方六五〇人に与えられ

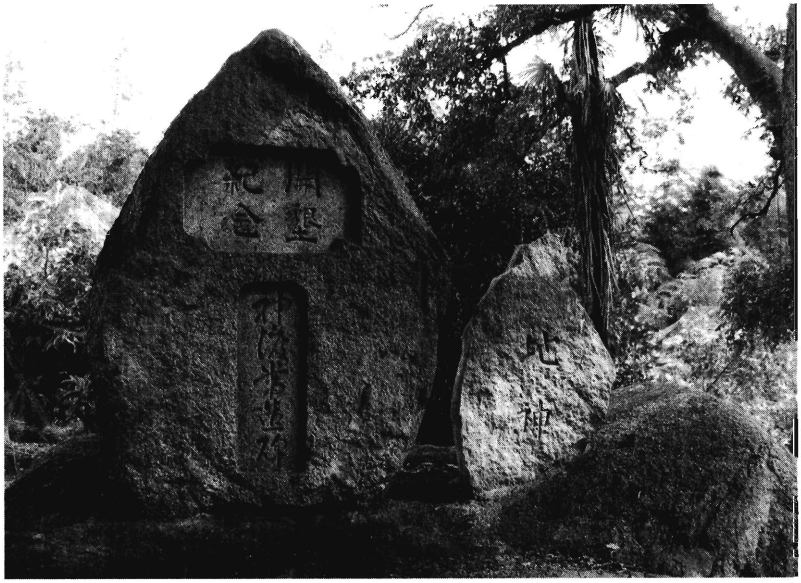

写真１　地神［ジジンサマ］と開拓者・神渡常造の碑（2008年９月）

た領有権であり、江戸時代にはその権利は株という持ち伝えられた（谷沢　二〇一一：一八五、丸亀市史編さん委員会　一九九四：一八四～一九七）。明治時代以降も、人名制は共有地や地先海域の権利として生き続けた。たとえば、地先の海は人名の株をもつ人たちによって占有されており、権利を持たない者は人名に入漁料を払って操業しなければならなかった。しかし、第二次世界大戦後、漁場に対する人名の特権は農地解放と同様な推移で、「国債と引きかえに一度政府に移り、政府からさらに漁業組合に移」り、海からの配当金は人名の手にまったく入らなくなった（榊原　二〇一一：二一三）。塩飽船方六五〇人に与えられた人名の株のうち、手島には六六株が保有されていた（谷沢　二〇一一：一九四）。

筆者調査の聞き書きをまとめれば、次のようになる。《手島では人名の権利をカブウチの権利といっていた。小手島には人名株はなく、小手島は手島の人名持ちだった。小手島の土地や沿岸の漁業権は手島でカブウチの権利を持つ人たちの持ち主になっていた。第二次世界大戦後、農地改革で農地は払い下げられた。昭和三〇年から四〇年の頃に、小手島の土地（宅地や山の権利）を手島の所有者（カブウチの権利を持つ者）から買い取って、小手島の人たちに分譲した。総額で八〇〇万円くらいだった。》

『四国新聞』に連載された「島びと二十世紀」において「人

名の遺産」と題された回では、戦後、手島と小手島が歩み分け、大きく明暗の分かれた戦後史が、〔人名の島として栄えたが急速な過疎に悩み海から遠ざかっていった手島〕と〔手島の開拓地だったが漁業の島としてにぎわいを手に入れた小手島〕という対照で描き出されている。

〔手島は人名六六人を擁する島で、出稼ぎ大工と農業で栄えたが、戦後、一次産業が衰退し漁業に転換を図ることもなく過疎化していった。一方、小手島は、戦前には土地は手島の財産であったため、新しい畑をいくら増やしてもその収穫は年貢にとられ手元にはほとんど残らなかったが、戦後、漁業法改正による漁場開放で小手島にも漁業権が認められ、イカナゴ漁を中心に安定化した。〕（四国新聞社　二〇〇〇）　〔　〕は要約した引用を示す。

手島の開拓地だった小手島が漁業の島として発展できたのは、手島の束縛から脱し、手島を媒介としないで、小手島の外縁系＝海縁ネットワークを形成できたからである、と私は考えている。

③海縁ネットワークを作り出す人・技術・モノ

下津井のデガイ

海縁ネットワークを作り出す人・技術・モノとして、魚問屋（仲買・鮮魚運搬業者）が各地に出向いて魚を買うデガイという行為がある。出て行って買うからデガイというのだが、売る側の方からいえばカイフネと呼ばれていた。彼らの行為が作り出す関係というものがある。魚問屋のデガイが島々を、浦々をつなげていくのである。第二次世界大戦前、下津井の魚問屋のデガイが、瀬戸内海の島々、浦々をつないでいった存在であったことを、下津井の魚問屋に生まれ育った角田直一は、次のように書いている。

〔下津井の魚問屋が流通機構のすべてをにぎっていた。下津井沖でとれた魚はすべて魚問屋に集められ、問屋の手から小売人に売り渡されたり、淡路島から来る鮮魚運搬業者に転売されたりした。
活魚を生かしたままで保存する活魚船（イケフネ）をドブネといった。ドブネは船の大半が活け間（いけま）からできていた。活け間とは、「船底、船腹に適当な間隔を置いて長方形の小さな孔（あな）をあけ、活魚が遊泳するに必要な海水を導入する間仕切り」のこと

である。船底や船腹の孔には木製の栓がついていて、その栓で孔をふさげば、入ってくる海水が遮断される。活け間から手網で遊泳中の魚を捕まえたり、海水をくみ出してタコを捕まえたりした。

また、ドブネにはさまざまな付属船がついていた。小型のドブネ、タコを活かすタコ船、陸とドブネの間を行き来するテンマ船などである。これらは互いにロープでつなぎ合わせて一つのかたまりになって、いつも決まった場所に固定されていた。

漁師は、魚問屋のドブネに漁船を横付けして、魚を売った（写真2）。それぞれの魚問屋は自分の店に魚を売ってくれる「ひいき」の漁家集団をにぎっていた。港の外に鮮魚を買いに出ることを沖買いとか出買いといった。大正時代になると、動力付きのイケフネ付きの巡航船が出てきた。

讃岐の観音寺、伊吹島方面、塩飽海の魚がほとんど下津井の出買い船の手によって、下津井の魚問屋に集められた。」（角田　一九八一：一九八～二一三　角田・中西　一九八九：二六～二七）

第二次世界大戦後、魚問屋による鮮魚運搬業は影を潜めたとあるが（角田　一九八一：二一三）、戦後も魚問屋との関係は見られた。魚問屋が作った海縁は続いていた。筆者調査による

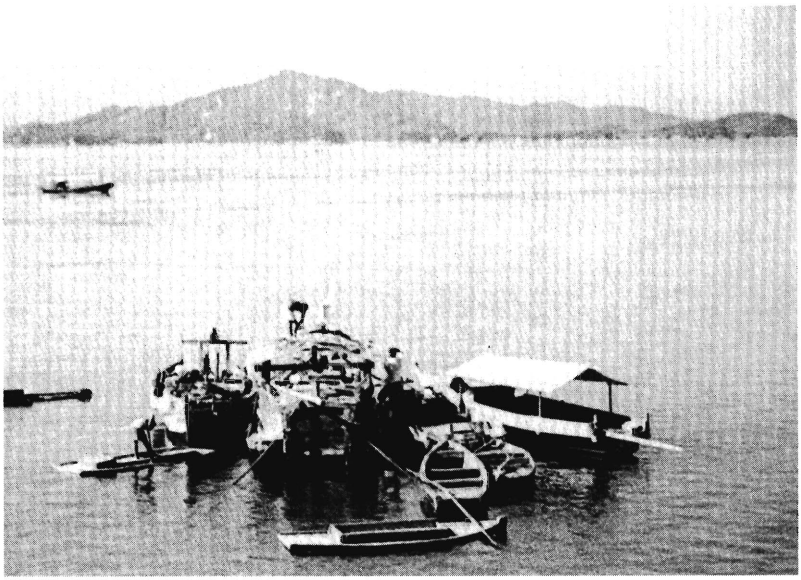

写真2　下津井港のドブネ［1939年］（角田・中西 1989：27）

と、調査時点（二〇〇八年頃）の状況では、《下津井からデガイに来るのを、小手島側ではカイフネと呼んでいる。タコ、イカナゴを、カメリン（亀林）、マルフク（丸福）に出している。その関係をほぼ決まっていて、三代にわたってつきあいがあるという人もいる。マルフクからカメリンに代えたという人もいた。[3]》

〔附〕釣り餌が作り出す関係―餌のデガイ

このほかに、下津井のデカイの中で餌のデガイも、海縁ネットワークを作り出した存在として移住地域で重要な役割を果たしたと考えられる。しかし、小手島の餌売りについては未調査である。（餌のデガイを販売する側からいえば「餌売り」である。）ここでは、下津井の餌のデガイについて河野（一九五四）をもとにまとめておこう。

〔餌のデガイとは、一本釣りや延縄の餌となるエビ、タコ、ムシ（ユウその他）、イカナゴなどをそれぞれの産地である漁村において購入し、それを漁村や出漁船に供給することを業とする者。大正七、八年から昭和二、三年が最盛期だった。

二月～四月のタイの最盛期には、シロエビ、アカエビ、モダコを餌とし、エビは大室、古下津井のものを買って下津井近海の漁場に持って行った。エビの餌を積んだ船は白旗、タコを積んだ船は黒旗を立てて、釣船はその旗を見てほしい方の餌を積んだ船に寄って行って、餌を買った。

五、六月はガタエビを多度津で買って、ビングシ縄の餌に売った。

七、八月はデキエビ、コエビを、犬島や小豆島北岸の長浜から下津井に運んだ。ギザミ、チヌ、タイウオの餌とし、大きくなったエビはビングシ縄やコチ釣りの餌に使った。

九、一〇月はオウゾウエビを、児島湾、犬島、牛窓方面や備前町前面、大多布、長島方面に買いに行った。オウゾウエビはヨシの生えているやわらかい沼地にわく。これらは兵庫沖で下津井からの出漁船に売った。

一月から三月、イカナゴやモダコ。イカナゴは愛媛県温泉郡浅海村大浦の波妻（はづま）で買い、下津井、鞆、尾道、吉和、二窓などへアナゴ縄の餌として売りに行った。モダコは、兵庫、播州二見、備前灘田（日生西方）、備中真鍋島、備後鞆で積んで、長州仙崎、筑前地の島、同沖の島、壱州郷之浦、伊予深浦に持って行った。筑前および壱岐ではよその土地（おもに長州の鶴江、玉江などの諸浦）から出漁してきているタイ縄（ナガレバイ）漁業者に供給した。〕（河野　一九

五四：二八七～二八八）

丸亀からのカヨイ

小手島には丸亀からカヨイ（通い）という生活スタイルをとりながら漁業をおこなっている人たちがいる。筆者調査によれば、調査時点（二〇〇八年頃）の状況では、《小手島の通いの漁業者というのは、小手島の漁協組合に属しながら丸亀市内から通勤している人のことであり、そのような形態をとる者が多く見られる。「三分の二以上は丸亀から通っている」という。もともと小手島に居住し家もあるのだが、子どもの学校の関係などで市内に引っ越したため、丸亀から通いという形をとっている。小手島の漁業組合員であり続けるのは、漁業権の関係からである。小手島の島まわりで漁業をおこなうためである。彼らは小手島周辺でマダコやイカナゴをとっている。丸亀から通いの人たちは漁獲物（イカナゴ）を多度津にも出している。タコは下津井に出している。「小手島だけ今でも御輿が出ている。小手島の秋祭りには、丸亀市内に住んでいる人たちも帰ってくる。そうでないと、みこしの担ぎ手がそろわない。そのため、祭日を臨機応変に変えている。祭日はシオに合わせて決めている。ミチシオでやることになっているが必ずしもそのようにやっているわけではない。年寄りのいうことをかたくなに守っていると続けていけなくなる」という。》

通いというスタイル（漁場行動）は小手島を支える海縁ネットワークのひとつである。

＊補遺―続・犬と移住

前号（野地　二〇一一ａ）において私は、「犬と移住」という項目を立てて、柳田国男が島に犬を連れて行くことを禁忌とする本源的な理由をその島が葬地だったからと推測したことに対して（柳田　一九九〇）、犬を連れて行くというのは移住と土地占有を示す行為であったため、島に犬を連れて行ってはいけなかったのだろうと述べた。

小手島では犬を飼ってはいけないということはない。実際に犬を飼っている家はある。その小手島で、筆者調査で次のような話を聞いた。《明治時代の頃、小手島に人が住み始めた頃には手島の人が小手島で放牧をしていたというけれども、小手島にはそのような平坦な土地はない。入り江に牛をつないでいたていどではなかっただろうか。手島の人が自分の土地であることを示すために、土地の権利を主張するために、小手島に牛をつないでいたのではないだろうか。》

犬を飼うということではないが、動物（この場合、牛）を土地につなぐという行為はその土地の占有（私有）を表示する、という意味合いがこの話を語る島人の感覚にもとらえられるのではないだろうか。

【注】

(1)『島の人生』所収の初期作品には、一九三三年に発行された雑誌『島』に掲載されたものが多い。柳田は、雑誌『島』の時点では島の微視的なとらえ方を試みている。『島』第一巻三号の巻頭言は「島の個性」と題されて、この雑誌創刊の意義が、島の歴史の「漠たる綜括論」ではなく「出来るだけ詳細に且つ精確に、具体的なる観察を公けに」することにあると述べられている（柳田　一九三三：巻頭）。島を微視的にとらえる「島の個性」という問題意識は、『島』に発表した柳田の論文・報告に共通している。『島』の巻頭言は創刊号から三号までに載せられており、「島の個性」を含めてそれらの巻頭言はすべて無署名である。これらは柳田の文章であると思われるが、「島の個性」は柳田の定本著作集に所収されなった。このことからも、柳田は過去（一九三〇年代以前）に試みた微視的な島のとらえ方を否定し葬ったと言える、ということを私はかつて指摘した（野地　二〇〇一）。定本には所収されなかったこの巻頭言（「島の個性」）は、後に、二〇〇二年刊行の『柳田國男全集』二九巻（筑摩書房）には所収された。

(2)　移住漁民が移住先で構築する「専一的な技術」については、これまで、野地（二〇〇一　二〇〇八a　二〇〇八b）などでくり返し論じてきた。

(3)　マルフクやカメリンというのは、第二次世界大戦前から下津井にある「魚問屋十三軒」の中の二軒である。「魚問屋十三軒」の魚問屋には、丸長（まるちょう）、丸八、小橋、岩源（いわげん）、味万（あじまん）、亀林（かめりん）、辻源（つじげん）、笠伊（かさい）、笠松（かさまつ）、笠五（かさご）、角七（かどしち）、丸福（まるふく）、山秀（やまひで）があった（角田　一九八一：一九八）

【引用文献】

アチック・ミューゼアム（編）　一九七三　「瀬戸内海島嶼巡訪日記」日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書　二一』　三一書房

角田直一　一九八一　『暮らしの瀬戸内海　風土記下津井』筑摩書房　一九八一年

角田直一・中西一隆　一九八九　『下津井懐古　手帖舎フォト・エッセイ二』手帖舎（岡山市）

河岡武春　一九七三　「中国・四国篇（二）　解説」日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書　二一』　三一書房

河野通博　一九五四　「餌の出買」瀬戸内海総合研究会（編）『漁村の生態―岡山県児島市下津井田ノ浦―　瀬戸内海総合研究会村落総合調査報告第二輯』岡山大学法文学部内瀬戸内海総合研究会

榊原貴士　二〇一一　「泊と笠島の人名会のこと」田村善次郎・宮本千晴（監修）『宮本常一とあるいた昭和の日本5

中国四国②』　農山漁村文化協会
桜田勝徳　一九七〇　『海の宗教』　淡交社
桜田勝徳　一九八〇　「困窮島」『桜田勝徳著作集二』　名著出版
笹沢魯羊　一九三四　『大畑町誌』　下北新報社
四国新聞社（無署名）　二〇〇〇　「人名の遺産―新瀬戸内海論　島びと二十世紀　第一部塩飽の海人たち一六」『四国新聞』（二〇〇〇年一月一八日）
高取正男　一九七五　『日本的思考の原型』　講談社
谷沢　明　二〇一一　「塩飽の島じま―技もつ海人の辿った道」
田村善次郎・宮本千晴（監修）『宮本常一とあるいた昭和の日本5　中国四国②』　農山漁村文化協会
西尾實（校注）　一九五七　『日本古典文学大系三〇　方丈記徒然草』　岩波書店
野地恒有　二〇〇一　『移住漁民の民俗学的研究』　吉川弘文館
野地恒有　二〇〇八a　『漁民の世界　「海洋性」で見る日本』講談社
野地恒有　二〇〇八b　「海の行動学」『日本の民俗一　海と里』　吉川弘文館
野地恒有　二〇〇九　「移住開拓島の民俗研究序」『日本文化論叢』一七　愛知教育大学日本文化研究室
野地恒有　二〇一一a　「移住開拓島の民俗学ノート（一）」『日本文化論叢』一九　愛知教育大学日本文化研究室
野地恒有　二〇一一b　「復興と海縁ネットワーク」『季刊東北学』二九　東北芸術工科大学東北文化研究センター
丸亀市史編さん委員会（編）　一九九四　『新編丸亀市史二近世編』　丸亀市
宮本常一　一九六五　『瀬戸内海の研究　島嶼の開発とその社会形成―海人の定住を中心に』　未来社
宮本常一　一九七三　『私の日本地図一二』　同友館
柳田国男（無署名）　一九三三　「島の個性」『島』一（三）一誠社
柳田国男　一九九〇　「猫の島」『柳田國男全集二四（ちくま文庫）』　筑摩書房
柳田国男　一九八九　「日本の島々」『柳田國男全集一（ちくま文庫）』　筑摩書房
柳田国男　二〇〇二　「島の個性」『柳田國男全集二九』　筑摩書房

本稿は、平成二一年度～平成二四年度科学研究費（基盤研究(c)）「瀬戸内諸島の移住開拓島における定住化と海域ネットワーク形成に関する民俗学的研究」（課題番号二一五二〇八一五）の年次報告（一部）である。